榆木小学校　学校通信
No.３３
なりたい自分になる！
PLUS ULTLA
令和６年１２月１３日
文責　余宮

公開授業にあたり、交通整理など保護者の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

私たちの思いを受け取ってほしい人がたくさんいるんだ

本日は、熊本市教育センターのモデル校として熊本市の先生方に向けて榆木小の授業を公開しました。１６０人余りの参観者がいる中で、榆木の子どもたちの闊達な学びが繰り広げられました。保護者や地域の方々には、交通整理や駐車場整理などをお世話になりました。大変ありがとうございました。心からお礼を申し上げます。

５年生の子どもたちは、地域の環境課題を取り上げて解決の方策を提案する活動に取り組みました。そして今日、その提案をたくさんの先生方の前で行いました。

大切なのでもう一度。５年生の子どもたちは、授業公開日だからあえて発表をしたのです。

なぜか。

子どもたちの発表内容を事前に教えてもらったのですが、地域の環境問題、特にごみ問題を調べてみると、そこにはお菓子のかすなどのごみに混ざって煙草の吸殻など、大人にかかわるごみが散見されていました。子どもたちは行き詰ります。私たちが掃除をすれば、確かに一時的にごみはなくなる。しかし、これは持続可能な活動なのか、と。むしろ、私たち（子ども）の中だけでこの問題を発表しても、本当の持続可能な解決にはならないのではないだろうか、と。もっと広く提案をする必要がある、と。

だから、たくさんの大人がいる場面での発表が必要だった。

しかし、相手は大人です。子どもの意見にはもちろん耳を傾けてくれるだろうけれど、大人は経験豊富。もしかしたら、私たちの考えなんかもうすでに思いついているかもしれないし、ちゃんと受け取ってもらえるのだろうか。子どもたちの悩みは深く、本質的です。発表に至る練習にも熱がこもります。

「もっと、字の大きさがあった方が伝わるんじゃないの」

「色とか背景とか…そもそもこの提案でいいのかな」

提案には、やはり根拠が必要です。その根拠があいまいだと受け取ってはもらえない。「たくさんの教室でやれば」の「たくさん」はどのくらいの数なのか、正確に知る必要がある。だから、学校の数だけではなく、学級の数も調べないといけないよね。膨大な情報が錯綜し、目が眩むほどの調査を重ねていく子どもたち。侃々諤々喧々囂々（かんかんがくがくけんけんごうごう）の議論が続きます。

本気の学習って、こんな感じなんなんですよね。

知りたい、やりたいという意欲を越えて、「知ってしまったんだから、やらなければナラヌ」とか、「これをやるためには、しなければナラヌ」ことがたくさんある。切望に変わっていく。

たくさんの先生たちが参観するこの日に、５年生はあえて伝える活動を切望したんだな。

来校した先生方は、私たちの提案を聞いて自分の学校に戻るはず。そして、自分の学校や学級の子どもたちにも話すはずだ。その学校の子どもたちは、お家の方などたくさんの人に話すはずだ。そうなると、私たちの提案の影響力は相当広がるはずなんだ。

本当に、たくましい子どもたちです。

そして、ここからが我が榆木っ子の挑戦のスタートと考えたい。これまでも、学習のまとめとして提案を発表する場面はたくさんありました。でも、今回の提案発表は、子どもたちの願いからすると、むしろ問題解決のスタートという位置づけでしょう。

そう、検証が不可欠です。本当に伝わったのか。どのくらい伝わったのか。そして、その効果はどのくらいあるのか。さらなる効果を求めるために、私たちができることは何か。

これは、時間をかけた一大プロジェクトなのではないか、と私は思うのです。

今後も、榆木っ子たちの挑戦は続くでしょう。明確なゴールを定めず、状況をうまく活用し、リデザインしていくその勇気ある探究人（たんきゅうびと）に、本物の持続可能性を見出しました。